

## 逍遙点描

絵と文・中嶋嶺雄



### アデレードの丘より

もう10年以上も前になるが、オーストラリア国立大学の現代中国センター客員教授として、一年間をかの地で過ごしたことがある。私の学位論文にもなった『中ソ対立と現代』の完成に没頭できたことが何よりの喜びであったが、家族ともどもオーストラリア全州を旅行し、アウト・ドア・ライフを存分に満喫することもできた。

ドライブが主であったが、汽車や飛行機にも随分乗った。太平洋岸のシドニーからインド洋に面したパースまで、全長4000kmを横断するインディアン・パシフィック鉄道は、本来、3泊4日の汽車の旅であるのに、途中、ナラバー平原のただなかで17時間も故障で立往生し、パースに着いたのは5日目の真夜中だった。

パースの都市美は定評のあるところだが、私は、このときにも帰途立ち寄った南オーストラリアの州都アデレードの方が好きだ。秋空のもと、市の中心を流れるトーレンス川にブラック・スワンが遊ぶアデレードは、芸術祭とワイン祭りで知られる都市であり、どことなくウィーンにも似ている。市内を一望するライツ・ヴィジョンの丘でスケッチしていると、小学生の一団がやってきて私を取り囲み、引率の女教師が very impressiveだとお世辞をいってくれた。

(東京外国語大学教授)